

エピソード4 おばあちゃん？

チャコと共に草葉の陰の世界の事やその世界での音楽事情なんかを軽く話しながら街の中をブラブラするレイ。まあ、メンバー探しはそんなに急ぐことでもないからぼちぼちやれば良いのだが、あてもなくブラブラしていてもラチがあかない。レイはいい加減歩き疲れてきたこともあり、こう切り出した。

——ねえチャコ、なんかさあもつと効率的にメンバー探す方法ってないの？ 募集するとか、誰かの紹介とかさあ——

のほほんと街の風景を流し見しながら機嫌良さそうな表情で歩いていたチャコは、たった今メンバー探しをしていた事を思い出したような様子だった。今までしていたことをすぐ忘れて他のことに没頭するところはいかにも猫らしい習性だ。

——そ、そうだね。レイの言う通り。じゃあ、駆け出しバンドがよく集まるようなちっちゃいハコに行ってみようか？ あそこならメンバー探しもしやすそうだからね。——

——そんなのがあるのならさつさと言ってよ——と言う言葉が喉元まで出かかったけど、まあ行き当たりばったりの性格のチャコにそんなこと言っても仕方ない。そう、そもそも猫なのだから。

——でもチャコ、そこってどうやっていくの？ 私にも入れるとこなの？ ——

散々歩き回ってここからえらく離れた場所に連れて行かれて、そのあぐく生きている人間は入場お断り申し上げます……なんて言われたら堪ったものじゃない。レイは予防線を張るつもりでチャコに訊ねた。

——ああ、心配ないよ。 このお札があればどこもかしこも自由に入りたい放題。 じゃあ、行こうか？ ——

チャコはそう言いながら、レイに草葉の陰の世界を見せるために使った例のお札をまた同じようにポケットからクシャクシャな状態で一枚取り出し、適当に皺を伸ばしてそばに立つ電柱に貼り付けた。 ——

どうやらチャコはこのお札を何枚も持っているらしい。

——そんなところに貼り付けてどうするの？ ——

レイはごく単純な質問をチャコに投げかけた瞬間、電柱に貼り付けたお札がまばゆい光で燃

え上がり、そこに何やら重々しく頑丈そうな鉄で出来たドアが現れた。

街中に立つ何気ない電柱の前に突然扉が現れたと言うのに道ゆく人々は全くの無反応だった。このありえない現象が全く見えていないらしい。

——な、何これ！？ チャコこれどうなっているの！？ ——

——何ってこれがそのライブハウスの入り口じゃん。 ——

チャコは軽い笑みと少し呆れたような表情が混じった顔で軽いいのけた。

その扉はやや青みがかった真っ黒な鉄で出来ており、扉には赤ペンキによる手書きでこう書かれていた。

『HEAVEN'S HELL'S GATE』

『HEAVEN'S』の文字が荒々しく横線で書き消され『HELL'S』に訂正されていた。重々しい扉から漂う邪悪な気配と共に、このライブハウスの名前であろうと思われるペンキの文字が、この場所がいかにもヤバイ場所であるかを暗黙のうちに物語っていた。

——さ、入ろうか？ ——

全く物怖じせず、ファストフード店かコンビニにでも入店するかのような軽い足取りでチャコが太い鉄パイプで出来たドアの取手に手を掛けた。

——ちよ、ちよと待つて！　ここ大丈夫なの？　私、無事に帰れるの！？　——

レイは怯えた表情を浮かべ、少し汗ばんだ両手で取手を押し、ドアを開けようとするチャコの動きを阻止するように押さえた。

オカルト好きのくせに怖がりのレイの動物的本能が、この突如現れた不気味なドアに入るという行為に激しくレッドアラートを鳴り響かせていた。ドアの向こうに広がっていると思われるヤバそうな雰囲気想像するだけで手が震え、足がすくんだ。ドアの向こうにどんなもなくタチの悪い悪霊とか怨霊とかがいて、取り憑かれたり魂抜かれたりしたらどうしよう……。そんな不安で心臓はバクバク音を立てて、額にはじわりと汗が浮かんた。バンドメンバーを探すという目的は遙か彼方に吹っ飛び、今は怯えと不安で頭が一杯になっていた。

——なあゝにビビってんの。　大丈夫だって、そんなに怖いところじゃないから。そりゃたまにはややこしいのがある時もあるけど、そんな事は滅多にないし、そんなやつがいたらセキユリティが叩き出すから安心して。　——

チャコはうつすらと涙目になっているレイが安心できるよう、チャコなりに精一杯の言葉を掛け不安を取り除こうとした。

——本当！？　本当に大丈夫なんだよね！？　嘘ついたらカツオブシご飯もう作ってあげな

いからね！　ちりめんじゃこも無しだからね！　——

レイは自分でも一体何を言っているのだと思いつながらチャコに念を押すようにしつこく確認した。

——大丈夫、大丈夫。　さあゝ行くよ。　——

そう一言告げてチャコは扉の取手を両腕で押しドアを開けた。

目の前の鋼鉄のドアがゴゴゴゴ……　と重々しい音を響かせながら開くと同時に眩しい光と轟音がレイの目と耳に怒涛のごとく降り注いだ。

眩しい光に目が眩んでいたレイがゆっくりと目を開けると、目の前の光景はライブハウスのロビーだった。その奥にステージがあり見知らぬバンドが大勢の客を前にし、大音量で激しい演奏を披露していた。ロビーとフロアを隔てているドアが開けっ放しなので入口から入ったとたんに音と光の洪水に襲われたらしい。

ステージに立つバンドのメンバーはよく見ると、いやよく見なくても明らかに生きている人間ではなかった。真っ青な肌と所々に滲む血液らしき赤黒いシミ、おまけに体のあちこちにカジられたあのような欠損が見られた。

そう、そのバンドはメンバー全員がゾンビで構成されていた。レイは恐怖のあまりフツと気

が遠くなり意識が飛びそうになった。

「ちよっと、ちよっと、レイ！ 大丈夫？」

チャコが慌てて体を抱きかかえ今にもフロアに倒れてしまいそうなレイを支えた。レイは失神こそしていないものの歯をガチガチ鳴らせてかなり怯えている様子だった。

「チャコ！ あんなのがいるんなら前もって何か言つてよ！ いくらなんでも怖すぎるだろ！」

震える体から渾身の声を振り絞り大音量の音楽が鳴り響く中チャコに抗議した。

——くっそ、二度とカツオブシご飯なんかつくってやるもんか！——

レイは心の中で叫んだ。

「ははは、ごめん、ごめん、こっちの世界の事はレイならある程度は想像できているかな……なんて思ってたんだけど。いきなりはショックが大きかったみたいだね？」

チャコは詫びるような引きつった笑顔を浮かべ謝罪した。

「ざっけんなよ！ 心臓止まるかと思ったよ！」

レイはチャコの胸ぐらを両手で掴みながら涙目で収まらない怒りを再びぶつけた。

「まあ。まあ落ちて着いて、周りをよく見てよ、いろんなのがいるだろ？ ゾンビ、普通の幽霊、

ガイコツ、なんかよくわかんないけど半分透き通ったやつとか…… これがこっちの世界だよ」
チャコに言われて周りをゆっくり眺めると、チャコの言う通り、ゾンビどころの騒ぎじゃなく、幽霊やら、ガイコツやら、なんか人型の煙みたいなやつとか様々な人々？……いや人々と呼んでいいかわからない大勢の客がゾンビバンドの奏でる音楽に合わせて体を揺らし、拳を振り上げ熱狂していた。

「いろいろ見かけは違うし、レイからすれば怖くて戸惑うかもしれないけどみんな音楽好きなのだけなのだから大丈夫だよ。取って食おうなんてことしないから安心して」

チャコはレイを落ち着かせるようにいつもと比べてゆっくりと落ちて着いた口調で説明した。
チャコの説明を聞いて少し落ち着きを取り戻したレイは、さつきから自分が普通に口をパクパクさせてチャコと会話していることにふと気がついた。

「ねえチャコ、さつきからあたし普通に口で喋ってるんだけど、ここなら別にテレパシーとか面倒くさいことしなくてもいいんだよね？」

多分、問題は無いのだろうなと思いつつレイは肯定的な答えが欲しくてチャコに質問した。

「さつきここのドア通っただろ？ あのドアからこっちは元いた世界とは別世界。 あたしら二人とも周りからちゃんと見えているからレイが独り言言っているようには見えないよ。」

期待する答えが返ってきたレイはホッとすると同時に、テレパシーという馴染まないコミュニケーション方法をここでは取らなくていいことで少し気分的に楽になった。毎回毎回話しかける度に頭で考えたセリフを投げかけるなんて肩が凝って仕方がない。

目の前のステージでは先ほど演奏をしていたゾンビバンドが演奏を終え、聴衆からの声援に応えながらステージの脇から控え室に帰って行くところだった。

「ねえ、ここって今日はどのくらいのバンドが出るの？」

先ほどのゾンビバンドはなかなかハードな音楽スタイルで格好良かったが、他にもいろいろなバンドが出演するのならもつともつと聴いてみたいとレイは思った。

「うーん、数はわかんない。だってこれ、永遠に終わらないからね」

永遠？——レイにはチャコの言っている意味がすぐには理解できなかった。

「え、二十四時間営業、年中無休ってこと？」

「そう、元いた世界では一日二十四時間で区切りっていうものがあるけど、こっちにはそういうのが一切無いからノンストップでずーっとやってるよ。出演バンドもこのハコならオーディション無しでエントリーさえすれば誰だって出られるから駆け出しバンドが腐るほど集まってくるし」

腐るほどいる駆け出しバンドによる永遠に繰り広げられる演奏——わくわくすると同時にレイはこんな数多くのバンドの中で自分が歌っているバンドが聴衆に受け入れられ、記憶に留めてもらえるのだろうかと不安になった。

ステージにはメンバー全員が包帯で身をグルグル巻きに包んだミイラのバンドが演奏の準備をしていた。先ほどのゾンビと違い、体の見えている部分が殆どない分レイには少しだけ怖さがマイルドだったが、ボーカルミイラの赤く光っている眼が底知れぬ不気味さを醸し出していた。

このバンドは一体どんな曲を演奏するのだろう——レイは初めて目にするミイラバンドに期待を膨らませてステージを眺めている時、突如、演奏前の静寂を破る声が響いた。

「おい！ チャコじゃねえか！？ てめえこの前はオレのメシ横からつまみ食いしやがって！」

レイとチャコの背後から野太いダミ声が響き、チャコの全身にビクツと緊張が走ったのが、少し逆立った毛から見て取れた。

「や、やあガス！ 久しぶり！ 元気だった！？」

チャコが少し怯えた声で精一杯の空気を振り絞って応えた。

チャコに話しかけたのは袖のない革ジャンに身を包んだ身長二メートル近いオスのネコだった。歴戦の喧嘩の証なのか、片方の耳は一部食いちぎられたような欠損があり、右の目は大きな切り傷で潰れていた。筋肉だらけのがっしりしたガタイも至る所古傷だらけだった。喧嘩についてはそういう場数を踏んでいるらしい。

「てめえ、俺の飼い主が供えてくれた魚返しやがれ！」

「ご、ごめん。そ、その件についてはまたこんどゆっくりとお話をしようじゃないの？ いかかな？」

チャコがヒクヒクと引きつった笑顔でガスの怒りをなだめるように慎重に応えた。

「ちょ、ちよつとチャコ、あんたこのでっかい猫さんに何したのよ？」

レイがひそひそ声でチャコに話しかけた。

「いやそのね、ガスの元飼い主がガスのお墓にお供えした焼き魚が非常に何というかおいしうだったのでついついその、なんといいますか……？」

「ま、まさかあんた、盗んだの？」

レイがチャコの話を遮るように間髪入れず質問した。

「はい、ほんの出来心で——あつちで供えてもらったご飯って、こっちに持って来られるんだ



けど、まさかあれがガスの飼い主さんのお供えした魚とはつゆしらず——おいしくいただきました。今では反省しております」

「バカっ！——とんでもないことして！——ちゃんとガスさんに謝りなよ！」

二人のやりとりを込み上げる怒りを抑えながら聞いていたガスがレイに迫力いっぱいのだすの聞いた声で話しかけた。

「ネエちゃん何モンだ！？——関係ねえヤツはすっこんでな！」

あまりの迫力にレイは今にも失神しそうだった。さっきのゾンビバンドの怖さどころではない。

「あ、あたしはチャコの飼い主……っというか、チャコ死んじゃったから元飼い主か？……チャコがあなたのお魚食べちゃったみたいで本当にごめんなさい。あたしからも謝ります。許してやってください」

ガスのド迫力にビビりながらもレイは震える声で謝罪した。

「うるせえ、てめえが謝っても腹の足しにはなんねえんだよ！——そこで黙ってな！——で、チャコ、この落とし前はどうかつけてくれるってんだコラ！？」

ガスの声がさらに迫力を増し、周囲にも緊張が伝わったのか他の客たちも雑談をやめ、シー

ンと静まり返り始めた。

「さあ、どうするんだテメェ——」

ガスの頬の筋肉がピクピクと動き、今にもチャコに飛びかかり、強く握られた拳を一発お見舞いしそうだった。

「本当にごめんなさい！——うちのチャコが迷惑かけちゃって、許してあげて！」

レイがチャコをかばうように前に立ち塞がり大きな声で謝罪した。

その謝罪の言葉が終わるや否やガスが拳を振り上げレイ達に襲い掛かった！

「ごちゃごちゃうるせえんだよ！」

もう、ダメだ！——やっぱりこんなところ来なきゃよかった——

そう思い目を強く閉じた瞬間、フロアの少し離れたところから少し低めの女の声が響いた。

「おい、ちょっと待ちな——」

他の客たちはその声のする方へ視線を向けた。そこには長身で青い髪をした美しい女が煙草を吸いながら飲みかけの酒の入ったグラスを持って立っていた。

スレンダーなモデル体型を白のタイトなワンピースで身を包んだその女はゴツイエンジニアブーツを履いた足で静かに、そして流れるようにガスの方に歩き出した。グラスに入った氷が



カラカラと音を立て、静まり返ったフロアに響く。周りの客たちは徐々にその女の前から後ずさり、女とガスの間に道が開けた。

その女はレイとチャコのそばに来ると少し立ち止まり、彼女達を一瞥したあと、煙草の煙をゆっくり吐き出し――「だから心配だったんだよ、クソツ」と、小さい声でつぶやき、再びガスのほうに歩き出した。

「なあゝガス、ここは一つアタシの顔に免じて勘弁してやってくれねえゝかな？ あんたのご馳走は後でこいつらに何とかさせるからさあ」

今まで込み上げる怒りで周囲を震え上がらせるほどのド迫力だったガスがすっかり沈静化し、その美しい女の前に佇んでいた。

「あ、アンタがそう言うのなら仕方ねえ、チャ、チャコ次はねえからな、覚悟しとけ！」

ガスはそう告げると巨体で風を切りながら開きっぱなしのロビーへ通ずるドアを通り、ライプハウスの出口へ向かって歩いた。

「すまねえな、近いうちにうちのヤツをあんたのところに寄越すからちよっと待っててくれ」

その女は出口のドアに手を掛けたガスの背中に声を掛けた。

「さあーて、あんたたち、とりあえずこっちに顔貸しな」

女はそう言つてロビーへと向かうドアを顎先で指し示した。

「は、はい！」

レイとチャコは声を揃えていつもよりかなり甲高い声で返事した。

女は青い髪をなびかせ、先ほどと同じように右手に煙草、左手にグラスを持ち、ゆっくりとロビーの奥にあるドアに向かつて歩き始めた。レイとチャコは緊張しながら黙つて女の後に背中を丸めてチヨコチヨコとついて行つた。

「入んな」

女は STAFF ONLY と書かれたドアを開け、落ち着いた声でそう言つた。

中には三人がけのソファ、一人がけのソファがそれぞれ2脚ずつ、中央のガラステーブルを囲むように置かれ、部屋の隅に佇む事務机の上の灰皿はタバコの吸い殻が山盛りになっていた。壁にはこつちの世界のいろんなバンドのポスター所狭しと貼つてあり、すっかり色あせているポスターもあった。かなり以前に貼られたものであろう。

「汚ねえとこだけどき、まあー好きなどころに座んな」

女は吸い殻が山盛りになった灰皿で煙草の火を消しながら彼女達に告げた。

「さ、先ほどはありがとうございましたっ！」

レイが席に着く前に緊張した大きな声で女に礼を言つた。

「ほら、チャコもお礼言いなよ！」

レイが肘で軽くチャコの脇を小突きながら小声で囁いた。

「あ、ありがとうございます、リアさん！」

チャコが甲高い大きな声でお礼の言葉を張り上げた。

——リアさん？ チャコはこの人の事を知っているのか——

「いいよ、大した事じゃ無い。 だけどガスにはちゃんとご馳走用意して詫び入れときなよ。おまえならやり方わかるだろ？」

チャコがリアと呼んだその女は新しいタバコにジッポライターで火を点けながら、三人がけのソファにドカッと腰を下ろすと同時にチャコに鋭い視線を投げかけた。

さっきのガスとかいうでつかい猫も迫力があつたけど、このリアという女の眼力もかなりの凄みがあつた。ただ、ガスのそれが燃えるような熱いものであるのに対し、彼女の眼は見るものの全てを凍りつかせるような背筋のゾクゾクする冷たいものだった。そんじょそこのチンピラなら縮み上がってしまいそうだ。

「は、はい！ わかりました！」

いつもフニャフニャして、何事にもいい加減なチャコがリアの前では文字通り借りてきた猫といふかなんというか、いわゆるいいコちゃんになっていた。

「まあさつきも言ったんだけど、二人ともカチコチに突っ立ってないで座んなよ」

「はい！」

レイとチャコはリアの向かい側にある三人がけのソファに、背もたれに背中をつけずにお行儀よく腰掛けた。

「で、とりあえずあなたは私のこと知らないみたいだから自己紹介するけどさ、あたしはこのオーナーのリアってんだ。よろしくな」

リアはレイにごく簡単に自己紹介すると、フーッと一息煙草の煙を吐き出した。

「よ、よろしくお願いします！ 私は……」

そこまでレイが話したところでリアが突然その言葉を遮った。

「レイだろ？ 知ってるよ」

——は？ なんでリアさんが私の名前知ってるの？ え？ 何？——

「あのー、どこかでお会いしましたっけ？」

レイはそんなありえない質問をリアに投げかけた。初めてこつちの世界に來たレイがリアに

どこかであつてゐるはずがないのだ。レイは緊張のあまり自分が変な質問をしたことすらわかつていなかった。となりにゐるチャコもなぜリアがレイの事を知っているのか不思議に思ったよ
うで、ポカンとした表情を浮かべながら先ほどと同じように姿勢正しく座つていた。

「フツ、まあ会つたことはないんだけどね。縁あつてこつちからはあんたの事ずつと見てたよ」

「え？ 見てたつて……縁つて……ど、どう言う事ですか？」

レイがきょとんとした顔でリアを見つめた。チャコも何が何やら訳がわからない感じで眼をパチパチさせていた。

「まあ隠すことでもないから言つちゃうけどさ、あたしあんなの遠いご先祖にあたるんだよね。何代ぐらい前かはつきりしたことは覚えてないけどね」

「えーっ！ あたしのご先祖さま！ すごい！ ……つてことはあたしのおばあちゃん！？」

レイがそう言つた瞬間、レイの視界には光り輝く星がフラッシュし、脳天に激痛が貫いた。

激痛が少し引いて、頭を抱えながら視線を上げると、そこには拳を握りしめたリアが重々し空気をまとい、一段とすごい冷気をその視線から発し立っていた。レイはゾクゾクする冷気と恐怖のあまり今にも凍つてしまいそうだった。

「今度、おばあちゃんて呼んだらブチ殺すよ。おぼえって」

リアが怒りで軽く声を震わせながらゆつくりとレイに警告した。

「は、はい……わかりました。ご、ごめんなさい」

レイは痛みを堪えながらリアに謝罪した。

となり にいたチャコはリアの怖さに加えて、リアがレイのご先祖さまという事実を目の前にして大きな口を開けたまま嘔然としていた。

「まあ、なんだ、とにかく遠い先祖だから、それとなく子孫のレイのことが心配でちょこちょこ見てただけだよあー、どこぞの化け猫が、事もあるうに、こっちの世界にレイを連れて来ちゃってさあー……」

リアは煙を吐き出しながら今までレイに注いでいた、凍てつくような視線をチャコに投げかけた。

チャコはその視線を受けてビクツと反応し、全身の毛が一瞬逆立ち、しつぽの太さも一瞬倍ぐらいに膨れ上がった。

「ご、ごめんなさい！　すみません！　ど、どうしてもレイとバンドやってみたかったからつい連れて来ちゃいましたっ！」

チャコが半泣き状態で立ち上がり、リアに向かって深々と頭を下げた。いつものチャコからしたら想像できないような礼儀正しさだ。

「もういいよ、連れて来ちゃったものはしょうがないし、ただ、これ以上ややこしいことにレイを巻き込むんじゃないよ。もしあたしの子孫に何かあったらあんたもただじゃ済まないからね。そのところはきつちりと覚えといて」

リアは先ほどの凄みのある視線をほんの少し和らげチャコに注意を促した。

「はい、わかりました！」

チャコは先ほどと変わらずありえない礼儀正しさだ。

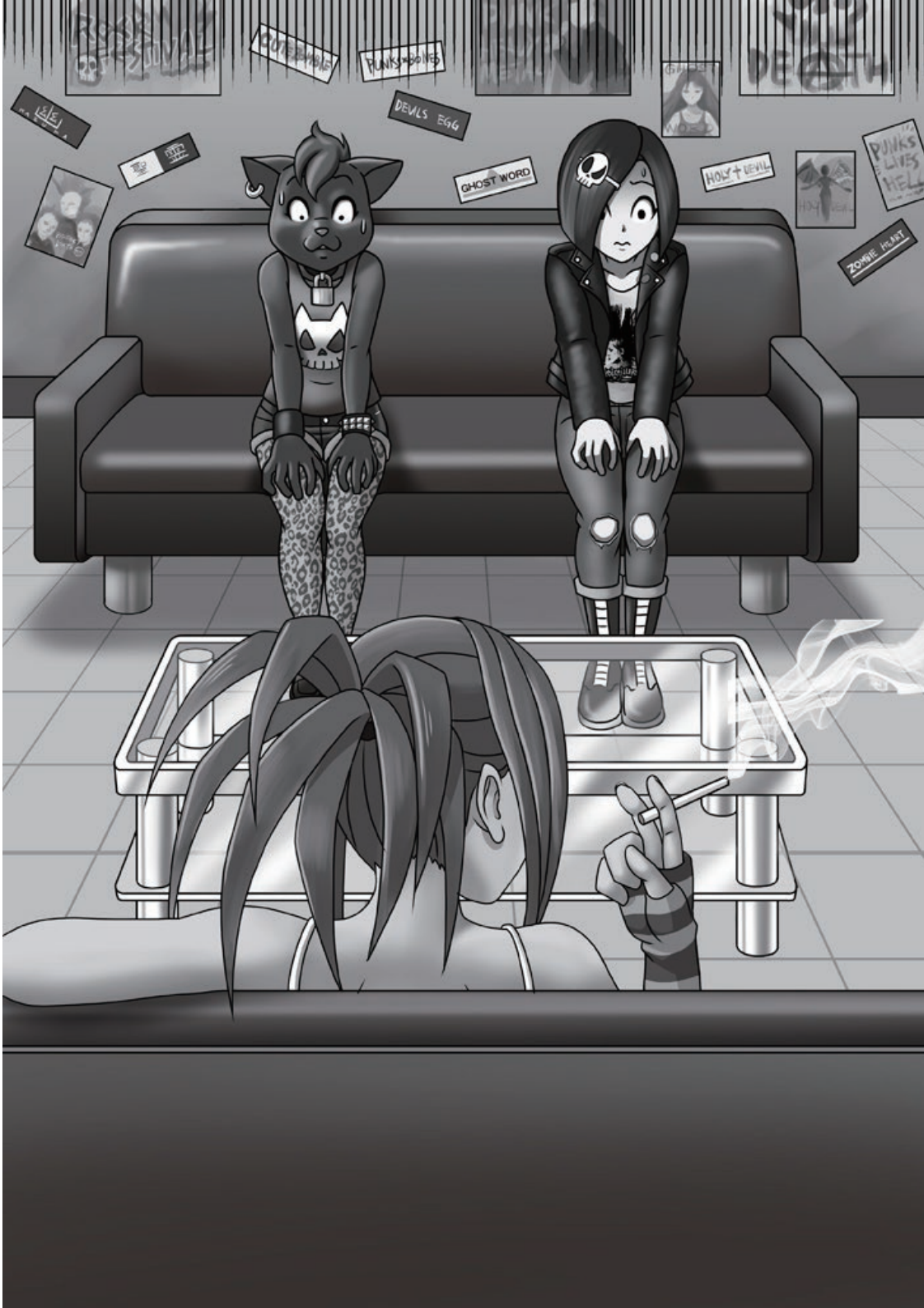
「つてことで、あんたらメンバー探してんだろ。とりあえず、あたしをドラムにしな。これはご先祖さまからの命令だよ。拒否は認めないからね」

「えっ！　おば——リアさんがドラムやってくれるんですか!?!」

レイは当然の申し出に少し興奮し、思わずおばあちゃんと呼んでしまうところだった。

「あんたら見てると危なっかしいからね。ドラムなら昔やってたし、レイがボーカルやるってんならステージで後ろから見てられるしね」

「ありがとうございます。ご先祖さま」



レイは立ち上がり深々と頭を下げた。チャコもつられて、一緒に頭を下げた。

「ご先祖さまは堅っ苦しいからリアでいいよ。これからはおなじバンドのメンバーなんだからね。チャコ、お前もそう呼んでくれていいよ」

すっかり表情を和らげたリアが少し笑みを浮かべながら二人に告げた。笑顔を浮かべたリアはまさにクールビューティーといった感じで、女であるレイも憧れてしまいそうなオーラをまとっていた。女子校ならバレンタインにチャコレートを山ほど貰えそうだ。

「じゃ、じゃあ、リア、ついでと言っては何ですけど、他のメンバーってどこかにあては無いですか？ どうやって探したらいいのか全然わかんなくて……」

リアがこのこのオーナーなら音楽活動している幽霊達には顔が広いはずだから、きっとバンドに入ってくれるメンバーが見つかるはず——レイはそう思った。

「あと、必要なのはギターとキーボードなんですけど」

チャコが少し身を乗り出してたみかけるようにリアに告げた。

「そうだね、キーボードなら上手いくせに、いつもブラブラとヒマそうにしているのが一人いるな。あと、ギターはあたしが無茶苦茶気になっているやつがいるんだけど、そいつが、その、ちよっと面倒なやつでさあ。まあ、会ってみればわかると思うけど……、まあとにかく先にキー



ボードに当たってみるか？ 今どこにいるのか全くわかんないから見つけたら連絡してやるよ。
そんな時がきたらまたここに来な」

こんなに順調にメンバー候補が見つかると思っていなかったレイは心が高揚していた。
リアはちよつと怖い人だけど、血の繋がったご先祖で、しかもライブハウスのオーナーとい
うのが実に心強い。チャコもしっぽがピンと立って心なしか浮かれているように見える。

まずはキーボード、どんなメンバーと巡り会えるんだろう——レイは自分が歌えるロックバ
ンドの誕生にこれまで以上に期待を膨らませた。